

毛利家旧蔵本の素描

- 『西園寺家鷹百首』 を端緒として -

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学図書館 公開日: 2021-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 成里 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21699

毛利家旧蔵本の素描

——『西園寺家鷹百首』を端緒として——

一、はじめに

——文化資源としての毛利家旧蔵書物群——

本学中央図書館には萩藩毛利家旧蔵の書物群が存しており、約八五〇〇冊もの古典籍が収蔵されている。

近時、二〇一七年五月一八日から二八日の会期で、本学で開催された中世文学会（二〇一七年五月二七、二八日）に合わせて「第68回 明治大学中央図書館ギャラリ―展示」として、「明治大学中央図書館の日本中世文学関係典籍―毛利家旧蔵の歌書・連歌書を中心に―」、博物館においても「新収蔵・収蔵資料展2017」が企画され、

展示会が催行された。

展示には貴重書が多く出品され、日本中世文学に大きく関わる著名なものを開陳するとともに本学の文化資源を世に知らしめた。これと前後して本学所蔵本の分析も含めた長門本『平家物語』を精査した平藤幸氏による論考¹も発表されており、毛利家旧蔵の書物群（以下、本学中央図書館の分類にしたがって、書物群の総体を毛利家旧蔵本と呼称する）を再評価するべき時期が到来している。

執筆者は二〇二〇年二月より本学の毛利家旧蔵本の調査を開始し、現在も継続中である。

中村 成里

さて、本稿は『西園寺家鷹百首』（請求記号091.4.24/H以下『鷹百首』と略称する。特に本学中央図書館所蔵本を明大本と呼称する）の紹介を端緒として、毛利家旧蔵本の全体像の素描を試みたものである。

二、『鷹百首』の諸本

本節では『鷹百首』の概要及び諸本、伝来について述べていきたい。

明大本『鷹百首』は二〇一七年度の展示では出品されなかったが、毛利家旧蔵本にして室町末期の書写にかかるといふ古写本である（『国書総目録』）。

先行研究を閲すると、説話や和歌、故実、鷹狩の作法などを包括した所謂「鷹書」の総合的研究が二本松泰子氏²、三保忠夫氏³などによって為されており、主に中世から近世にかけての放鷹に関する言説が分析されてきた。「鷹書」は膨大に残存しており、一つの文学的ジャンルとして認知されつつある。

さて、『鷹百首』には鷹にまつわる和歌が収載され、西園寺公経（一一七一—一二四四）の作とされるも、木村尚志氏は「仮託とらしい⁴」と述べている。

そして、『鷹百首』の諸本研究は山本一氏によって先鞭が付けられ、「たかやまに」類、「かすめども」類、「みゆきせし」類と分類された⁵。その後、山本氏は「たかやまに」類の分類を進め⁶、これをふまえて三澤成博氏も論考を発表している⁷。その後、大坪舞氏は「たかやまに」類の伝本を整理して、第一〜七類に分類した⁸。

大坪氏によれば、明大本の属する第四類本はさらに第一種と第二種に分かれ、第二種はさらにイ〜ホに細分化される。明大本は第二種二類に属するという。二類には①桐村家伝書蔵本（資料番号五、以下、桐村本と略称する）、②富田茂之氏蔵本（国文学研究資料館マイクログラム番号ト二一一一、以下、富田本と略称する）、③明大本、④島原図書館松平文庫蔵本（松八六・四一、以下島原本と略称する）、⑤宮内庁書陵部蔵松平本（資料番号一五四・三三四、以下、松平本と略称する）が該当している。

では、大坪氏の論から明大本の書誌情報を引用する。なお、執筆者も調査した際に同様の結果が得られたことを附言しておく。

〔室町末期〕写。袋綴一冊。墨色無地表紙（二七・五

×一九・八糶)。左肩題簽に「西園寺家鷹百首」とあり。扉(元表紙)題「鷹百首」。内題・作者表記は「鷹百首 西園寺相国公経公」。墨付一九丁。遊紙は新補前一丁・後一丁(仮綴時代の共紙表紙)。每半葉八行・歌一行書。奥書なし⁹⁾。

明大本と同類の諸本①②④⑤との直接の書承関係はないようだ。なお、明大本に同じく每半葉八行の書が他の毛利家旧蔵本にも散見され、萩藩の蔵書形成時期に関わる可能性が¹⁰⁾ある。

ところで、大坪氏は『鷹百首』に収載された一〇〇首のうち、3、5、7、10、11、12、20、25、26、36、43、45、49、61、64、75、81、84、100番歌の注について検討を加えている。

このうち、61番歌の注(紙幅の都合上本文の引用を割愛する)は、④島原本、⑤松平本が一類本と共通している¹¹⁾ので、①桐村本、②富田本、③明大本／④島原本、⑤松平本の二グループに分かれるのではないか。島原本と松平本との関係も今後明らかにされる必要がある。

次に、『鷹百首』16番歌の諸本間に問題がある詞書を検討する。

先に山本氏は、九州大学図書館細川文庫本(四類本第二種八類、資料番号九〇・五四四・タ・六)の17番歌の長文の注が16番歌注として誤記されていると指摘している¹²⁾。大坪氏はこの点に触れないが、明大本にも同様の現象が見られる。それでは明大本の本文を挙げて確認したい。便宜上、歌番号を和歌本文に上記した。傍線は執筆者によるものである。

16狩衣さのみはいか、鷹の尾のたすけは人のふるきなりとも

たすけは尾の名也鈴付尾の下の事也かり衣とは狩に出る時の衣也餌袋を人の方へ遣にも又常にもをきゑを入されはいまう事也餌袋にいろ、をさすと云也 昔源正頼卿北山のほとりに女を思ひけり野へ出る時彼女のもとへ行とて餌袋を遣ければ女鷹儲をしけりある時餌袋を遣てゆかすして餌袋はかり取に遣ければ女いか、思ひけむ

のき羽うつましろの鷹の餌袋にをき餌もさ、てかへしつる哉

と詠してかへしければ其鷹やかて死にけりそ

れより猶ふかく鷹にいはむ事也

17 餌袋にかれかはきたる古をきゑさして用なき身を
そすてえぬ

ここで、傍線部「のき羽うつ」歌が本来は詞書に入り込むべきところ、和歌本文として記されているとわかる¹²。これも諸本分類の要諦となろう。

以上が『鷹百首』の諸本研究において後考が俟たれる主な問題点となる。

三、萩藩毛利家と「鷹書」

本節では、萩藩毛利家の蔵書目録から、同藩書蔵の「鷹書」について概観していきたい。

明大本は、江戸時代後期の書写と推される萩藩所蔵の文書目録、山口県文書館蔵『宝库御書物目録』（資料番号 毛利家文庫五四目次・六七）、『御書物目録 大御納戸』（資料番号 毛利家文庫五四目次・四七）に「西園寺家鷹百首、壹冊」と記されたものと同定される¹³。

しかし、萩藩毛利家が所持していた「鷹書」は『鷹百首』だけではない。『御書物目録 大御納戸』によると、

天保一〇年（一八三九）の段階で『鷹百首』以外に鷹にまつわる書物群が以下の通り確認されるのだ。

- 一、鷹字考 附犬 壹冊
- 一、鷹書 壹冊
- 一、古今鷹書 壹冊
- 一、鷹名所 壹軸
- 一、鷹繫之図 壹冊
- 一、鷹書 壹冊／〈外題〉重就公御筆
- 一、近衛龍山様鷹書 壹通

右に挙げた萩藩所持本は現在散逸しているが、「鷹書」を萩藩毛利家が蒐集していた痕跡が確認される。

補足すると、徳山藩毛利家旧蔵書を多く現蔵する山口大学図書館の『棲息堂文庫目録』¹⁴所載の「鷹書」は、「鷹百首（西園寺公経）」「鷹百首（近衛前久）」「鷹三百首」のみで萩藩よりも少ない。萩藩はなぜ「鷹書」に関心を持っていたのか。

大坪氏は、「たかやまに」類とその享受について「所収歌が南北朝期の成立とみられる『和歌集心鉢抄抽肝要』に引用され、早くより和歌・連歌の学の枠内にあった」

と指摘したうえで、その注について「鷹故実の説が織り込まれた注は三条西実隆周辺の成立である『藻塩草』に引かれ、鷹の知と和歌・連歌の学との接点であった¹⁵⁾」と言述している。大坪氏は『鷹百首』の意義を、鷹狩の故実すなわち鷹の学知と和歌や連歌との結節点となることに見出している。

たしかに萩藩毛利家は漢籍、和歌、物語、連歌資料を豊富に所持していた。そして、萩藩所蔵の「鷹書」を通覧すれば、「鷹字考」は辞書的な書物であったろうし、「鷹名所」は軸装であるので鷹狩りの名所絵であった可能性が高く、「鷹撃之図」も鷹狩における作法を図示したものであったか。かくして、和歌や連歌とともに「鷹書」にも目配をした蔵書傾向が認められるのである。

なお、山口大学図書館現蔵「鷹百首（西園寺公経）」と明大本の関わりはまだ説明されておらず、これも今後考究されるべき課題のひとつである。

四、おわりに

——毛利弘元から重就へ——

最後に、本学中央図書館現蔵の毛利家旧蔵本について

の概要も述べておきたい。

たとえば『拾遺愚草』（請求記号911.148/27/H）下冊は、毛利弘元（一四六六一—一五〇六、元就の父）自筆本である。弘元は早世したが、安芸の国人領主であった頃から和歌への関心を抱いていた形跡が看取される。

毛利元就の和歌と連歌で構成される『御詠草』（請求記号911.15/66/H）は『春霞集』と同内容とみられるが、未だ詳細な研究はなされず存在も知られていない。

そして、毛利元康（一五六〇—一六〇一、元就八男）の関連資料からは元康が連歌に感興をもって接していた様子が看取される。『仮名遣定家卿御作』（請求記号091.4/28/H）奥書には「此一冊者、毛利大蔵大輔殿元康／御書写畢、一覽之次／誌之者也／文祿四年五月下旬／紹巴（花押）¹⁶⁾と示されている。ここから元康が『仮名遣 定家卿御作』を書写し、それを紹巴が文祿四年（二五九五）に閲した経緯が知られる。

さらに『出葉口伝抄』奥書にも「此一巻者、毛利元康依御執心／御懇望之間、口伝之已後、玄仍／染筆奉送之者也／慶長四年林鐘上旬／法眼紹巴（花押）¹⁷⁾とあり、毛利元康が熱望し、その間に玄仍（二五七一—一六〇七?、紹巴男）が口伝を終了した後、書写して送ったとする経

緯が記し留められている。

前出の『宝库御書物目錄』には、「一、九代集、壹冊／元康様御筆、外題奥書紹巴」とあり、元康自筆本の『九代集』が存したとわかり、毛利家の蔵書形成の初期段階における元康と紹巴の関わりが想定されよう。

さらに『宝库御書物目錄』からは、萩藩七代藩主毛利重就（一七二五—一七八九）の関わりも認められる。本学中央図書館現蔵『仙洞月次御会和歌 明和九年—一七月』（請求記号 911/33/D）、『御所御会和歌写 明和七年—一六月』（請求記号 911/35/D）、『仙洞御会和歌』（請求記号 911/42/D）、『禁裏御会始 天明七—八年』（請求記号 911/27/D）は、同日録によるといずれも外題が「重就公御筆」とされる。他にも『虫歌合』書写者および『月の歌』『鶉書』などの外題の筆者が重就と知られ、萩藩の充実した歌書資料の蔵書形成に貢献したとみられるのである。

本稿は、萩藩毛利家旧蔵本の素描に過ぎない。本学の文化資源である当該資料群への継続した調査と研究が、今後も望まれる。

- 1 平藤幸氏「資料紹介 萩明倫館旧蔵長門本『平家物語』首両巻をめぐって」『軍記物語の窓 第五集』和泉書院、二〇一七年
- 2 二本松泰子氏「中世鷹書の文化伝承」三弥井書店、二〇一一年二月。
- 3 三保忠夫氏『鷹書の研究 宮内庁書陵部蔵本を中心に』上冊下冊、和泉書院、二〇一六年。
- 4 『和歌文学大辞典』『和歌文学大辞典』編集委員会編、古典ライブラリー、二〇一四年。「西園寺殿鷹百首」項参照、執筆者は木村尚志氏。
- 5 山本一氏「鷹百首類伝本概観の試み」『調査研究報告』国文学研究資料館、一八、一九九七年六月参照。
- 6 山本一氏論文注5、同氏「鷹歌をめぐる二、三の考察」『日本文学史論—島津忠夫先生古稀記念論集』世界思想社、一九九七年九月参照。
- 7 三澤成博氏「鷹詞より見たる『和訓栞』の研究』汲古書院、二〇〇一年四月参照。
- 8 大坪舞氏「鷹百首「たかやまに」類伝本考」『古代中世文学論考』第二九集、新典社、二〇一四年四月所収。書誌情報を執筆者が改めて確認したが、同一の情報となるため、大坪氏の調査結果を掲載した。
- 9 前掲・注8大坪氏論文、三〇〇頁参照。
- 10 たとえば、『平家物語』（請求記号 092.4/29/H）、『千載和

- 歌集』（請求記号 911/63/D）、『御詠草』（請求記号 911.15/66/）
 Ⅱ）が八行で記されている。
- 11 前掲・注5山本氏論文参照。
- 12 他出の『金葉集』三奏本、『六花集注』本文を次に掲出する。
 引用の本文は、『新編国歌大観』による。
 をとこ心かはりてまうでこずなりてのち、おきたりける
 ゑぶくろをとりにおこせたりければかまつけてつかはし
 ける
 のきばうつましろのたかのゑぶくろにをきゑをおきてかへし
 つるかな
 （金葉集三奏本・雑上九十八首・五五五・桜井尼
 軒ば打つ目白のゑ袋におきゑもやうでかへしつるかな
 （六花集注・題知らず・三七六・読み人知らず）
- 13 樹下正隆氏「毛利家・萩藩旧蔵古典籍目録稿（1）」『毛利
 元就文書の基礎的研究—日本史と国語・国文学の共同研究の
 試み—（科学研究補助金 基盤研究（B）（2）』秋山伸隆氏編、
 県立広島女子大学国際文化学部、二〇〇三年三月所収。なお、
 『御書物目録 大御納戸』は、天保一〇年（一八三九）時点
 の蔵書目録とみられる。
- 14 山口大学図書館ホームページより目録をダウンロードして閲覧
 した。URL: [http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/kityousho/
 tokushu-mokuroku.html](http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/kityousho/tokushu-mokuroku.html)（最終閲覧日：二〇二〇年十一月
 一日）
- 15 前掲・注8大坪氏論文、二八四頁参照。
- 16 引用の本文は、牧野敦司氏・須藤あゆ美氏執筆二〇一七年
 展示目録『明治大学中央図書館の日本中世文学関係典籍—毛
 利家旧蔵の歌書・連歌書を中心に—』（明治大学図書館、
 二〇一七年五月）による。
- 17 注16に同じ。
 （なかむら・なり／明治大学商学部専任講師）